経営の〝こつ〟を尋ねる 第14回

銭と仕事は つかんでみなければ 分からない

佐々木 秀隆 氏
コンセック会長兼社長

広島大政経学部経済学科2部卒。1948年広島化工に入り、生産管理を担当。60年乳酸菌飲料製造の愛光舎を設立、72年日本鉱泉に改組と社名変更。同社社長兼任で2001年、東証（現）ジャスダック上場のコンセック代表取締役社長に就任。11年会長、13年6月から会長兼社長。1928年7月9日生まれ、呉市出身。

永続する企業、伸び続ける企業の経営には職人的な勘所がある。月1回連載でインタビュアー牛来千鶴が、経営の〝こつ〟を尋ねる。

運も実力 環境で、磨かれる

ただ者ではない。そんな雰囲気を漂わせている。豪快な冗談を連発し、周囲を笑いの渦に巻く。

「わしゃ、銭は要らん、要らんと言うのに、福沢諭吉さんが入りたいと言うので、入らせとるんよ」

お金は、自然に入ってくる。努力はあまり関係ない。

「全ては運」

と言う佐々木会長兼社長。

家系は神主の分家。祖父は綿屋を営んでいた。その信用から父は、呉市広町で株屋を営んでいた。後に東洋証券となる斎藤商店の、斎藤正雄さんには、よく頭をなでてもらったという。

子どもの頃、店番をしていると店員さんが、

「今が買い時ですよ」

「今が売り時ですよ」

と声を掛け、わずか2週間で株が売買されるのを、目の前で見ていた。

〝お金をもうけるセンス〟の基盤は、この頃既に身に付けたものかもしれない。

信じる心と 愛情の深さ

「被い給い 清め給え（はらいたまいきよめたまえ）」、「守り給い 幸え給え（さきはえたまえ）」

この30年間、神社に通い、かしわ手を打ち、唱えてきた。

実はその後にひと言、秘密の言葉を唱えるそうだが、

「これだけは、教えられん」

と笑う佐々木会長兼社長。どうやら大金持ちになる、おまじない言葉のようなものらしいが、教えてしまったら運気が逃げるらしい。

休みの日には、お墓参りも欠かさない。4年半前に最愛の妻を亡くしてからは、なおさら。

「これまでで1番悲しかったのはババが死んだこと」

と澄んだ瞳で話してくれた。

「生きとる時は面倒くさかったが（照れ笑）、死んで初めて分かった」

と言う。

「おい、と言えば新聞と分かる。黙っていても、お茶を持ってくる」

長年連れ添った夫婦である。いい時ばかりではなかったかもしれない。私の勝手な想像だが、泣かせたこともあったかもしれない。しかし今、目の前で妻への愛を語るその人からは、ただ純粋な思いだけが伝わってきた。

実は、もし自分が先にゆくようなことがあったら、碑に刻もうと思っていた言葉があるという。

「妻さと江を、こよなく愛した秀隆、ここに眠る」

やってみたからこそ つかめたもの

戦後、20歳の頃。呉から、妻と2人で広島に出て来た。勤め先のガラス工房の3畳の納屋に住み、

「お金は要らん！」

と父からの支援を退け、飲まず食わずの生活。布団は質に入れて、ご飯は鍋で炊いた。

「辛苦に耐えた人の味。霜に打たれて柿の味」

経験からにじみ出るその言葉には、重みがある。

その後、広島化工の生産管理担当を経て、32歳の時に乳酸菌飲料の製造会社、愛光舎を設立した。大手メーカーの下請けで、加工賃年1億円を売り上げたが、1社に依存したせいで、そこからの受注が切れた途端、窮地に陥った。

借金を抱え、天ぷらなどの練り製品を売って日銭稼ぎをしていて、ふと思った。

「飲む酢を作ったらいいのではないか…」

働きながら広島大工学部の醗酵工学科で学んだ経験が、アイデアを生んだ。さらに、

「ふだん多くの人が食べている物は何か」

と、大衆向けの商品を考え、思いついたのが、リンゴ。

リンゴ酢とはちみつをベースとして作られた健康飲料「ラバモント（La Vamont）」の誕生である。これが、改称した日本鉱泉で年間の利益を8億4400万円上げるヒット商品になり、今につながった。

やってみたからこその、結果である。

金持ちになる 条件

佐々木会長兼社長いわく、金持ちになれない人の条件は、

① 一流大学を卒業した人

役人や政治家、一流企業の社長になろうと考えるのでせいぜい年収は5000万円程度で、金持ちの域には入らない。

② 知能指数の高い人

将棋で一流の棋士がいくつもの先手を読むように「これはダメ、あれはダメ」と、リスクにばかり目が留まり、挑戦ができないから。

「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」

佐々木会長兼社長の言葉にも力が入る。

逆に、金持ちになる条件は、

① 心身ともに健康な人

ストレスをためない程度に、厚かましいくらいが良い。

② 仕事が徹底的に好きな人

寝ても、夢の中で朝が始まり、24時間働くような人が良い。

③ 正直な人

オブラートはどうせ溶けるので、そんなものに本音を包まず、スレスレのところを言うのが良い。

節約も大事。

「靴は（かかとが）減らんように飛ぶように歩く」（笑）

と始終、冗談が絶えない。

グループ会社は10社。介護サービス、ソフトウエアの開発・販売・ITコンサルティングなど幅広く展開している。

昨今、注目しているのは、水素を使って発電する燃料電池。核を使わずに済む、動く発電所として燃料電池自動車の部品を造るという夢が広がる。

「つかんでみんにゃ、分からん」

何事も、考えるばかりでなく、やってみるのが信条。10社の中には、業績の良いところも悪いところもあるが、

「粘って、粘って、ネバネバに なるまで頑張って、泥沼に入る寸前のギリギリまで諦めない」

と佐々木会長兼社長。

死んだら 社員のために奨励金制度を

建設向けダイヤモンド工具で業界ナンバーワンのコンセック。2013年3月期は連結で売上高87億2600万円、経常利益は8100万円、資本金40億9027万円。創業48年目に入った。

同社の創業社長でジャスダック上場を達成した岡田国夫氏は、広陵高の夜学に通っていた時の同級生である。その親友に頼まれて、苦境に陥っていた時の同社の株を3ヵ月で7%購入した。役員になる気はなかったが、周りに推され、01年、代表取締役社長に就任した。

「仁義礼智信」

は、佐々木会長兼社長の好きな言葉。社員にも、孔子の教えを学ぶように勧めている。

グループ会社の総社員数は500人余。〝こうをいらす〟（問題を起こす）社員もいるが、生前に妻が、

「社員を子どもと思えばいいじゃない」

と言ってくれた。2人の間に子どもは恵まれなかったが、500人もの子ども（社員）がいれば、寂しくない。

妻の葬儀の折には、弔電が350通を超え、多くの人に支持してもらっていることを実感した。自分が死んだ後は、社員のために「秀里会」をつくり、社員の子どもたちが安心して大学に行けるような奨学金制度をつくりたい。

そして、

「人生は、総じて面白かった」

と幕を閉じたい。

今年、86歳を迎える佐々木会長兼社長。全く年を感じさせない若々しさは、冗談を連発し、周囲を笑顔にするそのパワーが源に違いない。

〈インタビュアー〉牛来 千鶴
ソアラサービス代表取締役社長。人肌感覚のクリエイティブ共同オフィス「ソアラビジネスポート」を運営。「広島に〝あったらいいな〟をカタチに」を理念に掲げ、地場企業とのコラボ商品開発や人材育成など、地域を元気にするプロジェクトを推進している。
【主な公職】中小企業基盤整備機構 経営支援アドバイザー、県立広島大 経営審議会委員、広島市産業振興センター理事ほか。